

わか草



第51号 令和元年7月1日
発行 東京都立東部療育センター
広報委員会
東京都江東区新砂3-3-25



かもめ分教室入学式



入学式にて記念撮影

平成三十一年四月十日（水）今年度は二名の学年進級を迎え、「入学を祝う会」が執

り行なわれしました。新しいスタートを東部療育センターの皆様温かい雰囲気の中で祝っていたいただきました。卒業を祝う会は緊張や感動も多い会でしたが、入学を祝う会はゆったりと緊張せずにリラックスして受け止めることができました。高等部の生活がスタートし、二人とも意欲的に授業に取り組んでいます。高等部の経験をたくさん積み上げていきたいと思えます。（かもめ分教室）

ハローキティ訪問



キティちゃん 記念撮影

©1976, 2019 SANRIO CO., LTD. APPROVAL NO. G593943

三月二十二日（金）にハローキティの訪問がありました。昨年度は病棟での写真撮影会でした。今年は通所での写真撮影会となりました。成人通所の皆様は、バスを降りて到着するや否や目の前にキティちゃんが見れたので、驚きと嬉しさが入り交じった表情をしていました。乳幼児通所の皆様は親子で撮影会に参加できて嬉しさ一杯でした。ハローキティの訪問は、利用者の皆様がわくわくするだけでなく、職員も夢の世界を感じ取ることができました。（療育部）

乳幼児通所 春遠足



エサやり体験の様子

五月三十日（木）・三十一日（金）の二日に分けて、乳幼児通所で春遠足に行きました。場所は日本橋高島屋と大手町牧

場です。日本橋高島屋ではお洒落なレストランで食事をし、ポケモンセンターでは面白い物を楽しみました。大手町牧場にはヤギやアルパカ、牛、馬などたくさん動物たちがいました。皆さん一人ひとりがエサやり体験をしました。動物たちの迫力に驚きながらも、普段できないような体験をする事ができました。（乳幼児通所）

移動水族館



トラック展示車「うみくる号」で鑑賞

四月二十日（土）に、

葛西臨海水族園・移動水族館の訪問がありました。

午前中は乳幼児通所や病棟面会の家族で賑わいました。午後からは病棟利用者の皆様が病棟ごとに見学を楽しみました。

トラック展示車「うみくる号」では熱帯魚の水槽をみて「きれいだね」という声が聞かれた一方、近海魚の水槽を見て「美味しそうだね」と親子で会話がはずんでいました。触れ合いコーナーでは、

車椅子上から触れるように机の上にプールが置かれ、カニやヒトデを触ったり、ナマコを頬にくっつけて喜んだり笑い声が弾んでいました。

また、小さな水槽をベッド脇に移動してもらい、美しい熱帯魚観賞やヒトデやウニに触ることもできました。ドキドキして心拍数があがる人、握りつぶそうとする人もいて賑やかで楽しいひと時を過ごすことができました。（療育部 鶴田）



ウニとの触れ合いの様子

重症・心身障害児・者の薬物療法を支援する

薬剤検査科長 船津 久美

昨年の四月に、東部療育センターの薬物療法を支えている三名の薬剤師のうちの一として赴任し、はや一年が経ってしまいました。このセンターで働くことにより、それまでの薬剤師生活の中で大きくかわることがなかった重症心身障害児・者の方達へ薬剤師としての役割に関わるべきか？という大きなテーマを新たにいただいた一年でした。

当センターに長期入所されている方の約三割が呼吸器を常時必要とし、六割が経口摂取ではなく胃や腸への注入により栄養や薬剤を投与されています。超重症児とよばれるような濃厚な医療的ケアを必要とする方が特に多いのもこのセンターの特徴でもあります。一方で昼間はできる限り楽しく活動ができるように様々な職種が生活支援しています。そのような中いまままでの自分の常識が通用しなかったり、また新たな知識の確認が必要であったり、以前は想像もつかなかったいろいろな問題の発見がありました。

◇ポリファーマシー

ポリファーマシーとは、多くの薬を服用することにより薬物有害事象につながる状態や飲み間違い、残薬の発生につながる問題のことをいいます。最初に思ったのは「散剤が山ほど投

与されている。全部必要なのだろうか？この散剤をどのように、のませているのだろうか？果たしてちゃんとのめるのだろうか？投与に直接かわっている看護師さんはさぞ大変だろうな」と思いました。

昨年の夏の段階では、入所者一人当たりの散剤の数は一日約十七包で嵩も多く、薬を用意するときにこぼしてしまったりという事例も多々ありました。

薬剤師も約九十名の長期入所者全員の散剤を調剤するには、工程も多く非常に大変です。そのため勤務時間の大半は調剤で占められ、調剤以外のいろいろな要望が病棟からあっても何も応えられない状況でした。六剤以上の薬剤投与では一気に副作用が増加するというエピソードもあり、世の中ではポリファーマシー対策により処方薬を減らす方向に進んでいます。しかし、重症心身障害児に処方されている薬剤は必要なものばかりで減らすことができません。しかも先に述べたように注入の利用者が多いので必然的に管を通して散剤が処方中心になります。

◇簡易懸濁法の導入

錠剤を投与直前にお湯で崩壊懸濁させて管を通して投与する方法です。もともと、錠剤は、胃の中で溶解後、胃腸で吸収されて効果を発揮するよう

に作られているので、特別な工夫をさされている錠剤以外はお湯で溶解可能なものが多いのです。散剤に比べると嵩も少なく朝、昼、夕の飲み方が違う錠剤を一つの薬袋の中に一包化することができません。簡易懸濁法の導入により、必要な薬剤の種類を無理やり少なくするのではなく、服用するときの袋の数を減らすことができるようになります。

当センターでは、各病棟と医局の協力もあり平成三十年の八月から十二月の間に注入法を利用して利用者がさんへの簡易懸濁法の導入がすべて終了しました。一人当たりの散剤は一日約十二包と導入前の三分の二に減り、調剤時間も短縮することができるようになりました。今年一月より短期入所者の持参薬確認を開始し、現在では入所の利用者さんの五割を対象に持参薬の確認をしています。これにより、指示簿と薬剤の内容の確認や副作用、アレルギー情報の追加、入所中の薬物療法に関する注意事項などに薬剤師が関わっています。また、服用中の薬剤で不明な点ばかりつけの調剤薬局との情報共有により、スムーズに解決できるようになりました。

今後短期入所だけでなく病棟へのかかわりを多くし、少しでも病棟での薬に関する問題を解決していきたいと考えています。



◇途切れることのない 薬物療法への支援

医療的ケア児の増加に従い、在宅を中心とした訪問看護ステーション、在宅療養支援診療所、救命救急・小児科専門病院、福祉サービス事業所、地域中核小児科病院、障害者入所施設など、様々なところで薬物療法の情報の共有を図る必要があります。そのために、おくすり手帳やIC Tを利用した在宅支援情報の共有が進んでいます。

しかし、どの医療施設でも情報がうまく共有されているとは限りません。一度増量した薬剤が他の医療機関では元に戻っていたり、薬品名が違う同じ成分の薬剤が別の医師から処方されていたり、処方意図が伝わりにくい場合もよくあります。現在あるツールを上手に利用し効率的に利用していくには、実際に情報と物とを見て薬剤師が確認し、疑義が生じたときにはその解決を調剤薬局や元の医療機関などと連携をとり正しい薬物療法を継続できるように支援することが重要です。特に、薬剤アレルギーの情報や、抗てんかん薬など投与量変更中の時は情報の共有化は必須です。また、保護者がある内容を把握していることも大切なことであり、それを助けるのも薬剤師の役割です。

今後増加する在宅療養の方たちの支援も、センタースタッフの一員として薬剤師として利用者・患者に寄り添いながら、様々な役割を果たしていきたいと思っています。

「リハビリテーション医療と装具療法」

「装具外来の現状とその重要性」

講師 大國 生幸 先生

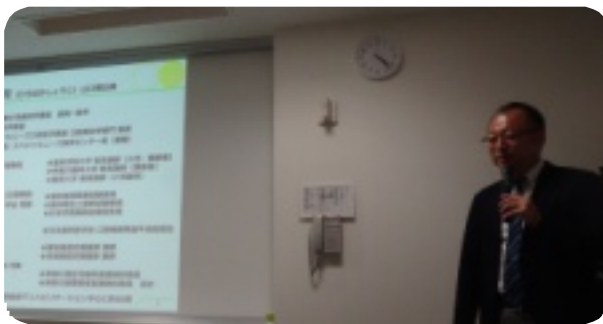


講師 大國 生幸 先生

四月十二日（金）東邦大学医療センター大森病院リハビリテーション科講師 大國生幸先生にご講演頂きました。大國生幸先生は当センター開設以来、非常勤医としてリハビリテーション科の診療を担当してくださっており、待望の御講演で、小児の成長発達と症状に応じた適切な装具を作成し使用することの大切さを教えていただきました。（院長 加我）

「障害児の歯科治療―口腔機能と食の支援」

講師 弘中 祥司 先生



講師 弘中 祥司 先生

五月二十八（火）日昭和大学口腔衛生学部門教授弘中祥司先生にご講演いただきました。先生は当センターの外來もご担当いただいております、様々な障害の特性に応じた治療法のアプローチや、口腔機能の発達障害の背景にある解剖学的発育発達に応じた食事内容の選択が大切なこと、うがいなど口腔運動、咀嚼機能、嚥下機能を評価する意味と方法について示されたうえで嚥下や摂食といった毎日必要な事象の訓練は楽しく行える工夫がないと続けられない点も指摘されました。障害児歯科学のご経験と知識を、最新の研究成果の一部を含めてわかりやすくお講義いただきました。（院長 加我）

「重症児との対話のために―理学療法士の視点から」

講師 小山 久仁子 先生



講師 小山 久仁子 先生

四月二十三日（火）当センターリハビリテーション科主査、小山久仁子理学療法士にご講演をいただきました。

長く、重症心身障害児・者と深く関わってこられた運動機能の専門家としての御経験と知識をいかした的確な理学療法を実践してくださっている背景に、障害児の状況を川に見立てて理解する「川の理論」、親御さんが、（またとくに支援者も）独りぼつちと感じないような支援者でありつづけるための「You are not alone」の精神について語り、感動を与えていただきました。（院長 加我）

「療育センターの心理として」

講師 西山 恵実 先生



講師 西山 恵実 先生

六月十九日（水）当センター主任心理士指導員西山恵実先生にご講演をいただきました。先生は準備室の段階から当センターに関わって下さり、病棟・通所では重症心身障害児（者）の発達レベル評価の重要性に鑑み、太田ステージ評価を応用しての指導に工夫をされ、外來では新患のおよそ半数に近い患者さんの評価の考え方や検査法の概要についてわかりやすくご説明いただきました。（院長 加我）

日本重症心身障害福祉協会
全国施設協議会報告
(茨城県・水戸市)



シンポジウムのような様子
(茨城県・水戸市)

令和元年の「日本重症心身障害福祉協会全国施設協議会」が、五月三十日(木)・三十一日(金)の二日間、茨城県水戸市の水戸プラザホテルにて開催されました。全国百二十

「全国重症心身障害児(者)を守る会」を
創立五十五周年記念大会
(東京都・品川)
記念大会は六月八日、九日の二日間にわたり港区高輪で開催され、当センターからは、加我院長、村田療育部長、私が出席したほか、会員など千百名が集まりました。
一日目は、北海道療育園の岡田理事長による「守る会の理念を確認する」をテーマとした記念講演に続いて、国立重症心身障害協議会の後藤副会長、親の会代表二名、厚労省の課長、文科省の調査官による「重症児者の豊かな暮らしのために」をテ

七施設、約三百四十名の参加のもと開催されました。

初日は厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課・障害児・発達障害者支援室・障害福祉専門官による「障害児支援施策の動向について」の行政説明がありました。

引き続き、特別講演として、独立行政法人国立病院機構茨城東病院胸部疾患・療育医療センターの小児科竹谷俊樹医師より「重症児をとりま現在の課題を考える」茨城東病院での経験から」の講演がありました。茨城県が抱えている重症心身障害児者支援の課題についての内容でした。

二日目は、「成人期に達した重症心身障害者の問題について」四名(堺市立重症心身障害者(児)支援センター児玉和夫所長・千葉リハビリ

マとしたシンポジウムが行われました。二日目は、『みんなで語ろう』が行われ、「入会したきっかけ」や「守る会に期待すること」などについて会員から発言がありました。

守る会の設立当初は、重症児者のための入所施設や在宅福祉施策もなく、重い障害のある子どもたちは法の谷間に置かれ社会から認知されていませんでしたが、わが子を思う親たちの切実な願いが少しずつ実を結び、この五十五周年に制度や施策が整ってきた重みを感じました。

シンポジウムでは、厚労省の課長から「福祉と教育の連携は進んでいるが、今後、医療と福祉の連携を充

テーションセンター愛育園石井光子園長・光の家療育センター鈴木郁子施設長・茨城県重症心身障害児(者)を守る会副会長の佐藤芳昭様)によるシンポジウムがありました。

千葉リハビリテーションセンターでは「親亡き後の想いを伝えるノート」を作成し、日頃からご家族死亡後のことについて聞き取りを行い、ノートに残していच्छやるとのことでした。そして、それは時々見直されて適宜変更されているとのことでした。非常に重要なことであり深く印象に残りました。

また、東京小児病院の木実谷哲史会長が退任され、新理事長として堺市立重症心身障害者(児)支援センター長児玉和夫所長が選任されたことも報告されました。
(療育部長 村田)

実していきたい」との発言や、『みんなで語ろう』では「ローリングベツド(二床を十人ほどの利用者がシェア)は、在宅の選択肢となるので他の市にも広げてほしい」との声のほか、「ショートステイの施設に連れて行くための片道五十キロの運転は、高齢の親にとっては厳しい」、「外出時に一番困ることはトイレ。赤ちゃん用のトイレでは小さすぎて使えない」などの切実な訴えもありました。最後に式典が行われ、八項目の要望書を確認し閉会となりました。
(事務長 松浦)



適正な「仕込み」がされている食物を使った料理は、仕上がりが美しく、食欲を刺激してくれます。また、包丁や皮引きの切れ味も「仕込み」のポイントです。
*当センターでは、担当者を決めて調理器具の手入れや清掃をしています。

～ 給食の紹介 (栄養科) ～
<< 調理いろいろ ～下準備をする～ >>

私達が食物を食べるためには、様々な加工が必要です。まず第一ステップは、「仕込み」です。

	目的	手段
野菜	有害成分の除去 軟かくする(食物繊維対策) 食物繊維が多く硬い部分を取り除く 食物繊維を短くして、噛み砕きやすくする	野菜の皮をむく・種を除去する 繊維に対して直角に切る 薄めに切る 大きさや長さを揃えて切る 隠し包丁を入れる
肉・魚	調理方法を考慮する 加熱すると硬くなる場合	肉は塊のまままで料理する(例:ローストビーフ) 筋を切る・切れ目を入れておく 繊維に対して直角に切る 肉耳筋などを筋繊維をつぶす 軟化剤(生薑やヨーグルト等)に漬ける

- 野菜
 - ・皮をむく
 - ・湯剥き
 - ・隠し包丁を入れる
 - ・大きさを揃える
 - ・繊維を断ち切る

- 肉 (例 ひれかつ)
 - ① 切りわけ
 - ② 「肉たたき」でたたく

そうすることで繊維が短くなり柔らかくなる

看護の日



「看護の日」イベントのようす
(スナモ 南砂町)

毎年恒例になったナイチンゲール生誕に因んだ「看護の日」のイベントが、今年も五月二十一日(火)にショッピングセンター南砂町スナモにて行われました。この日はあいにくの大雨と強風に見舞われましたが、三十名の方々にご来場いただきました。管理栄養士の村松主査による栄養相談に加え認定看護師である中野主査や宮川看護師による呼吸及び摂食嚥下に関する相談も行われ、来場した方々に喜んでいただきました。また、東部療育センターの日常の活動場面の写真を紹介することで、ご来場された方々にセンターを知っていただく良い機会となりました。
(療育部)

アローズ四重奏団演奏会



演奏会の様子

五月十八日(土)の午後、プレイルームでアローズ四重奏団演奏会がありました。代表の真鍋徹さんをはじめプロの皆様が演奏会でした。バイオリン、チェロ、ピオラの音色に会場の皆様はうつとりしていました。クラシック曲や「花は咲く」「なだそうそう」など口ずさみながら身体を揺らしていました。真鍋さんの司会も楽しく、ほのぼのとした素敵なお時間を過ごすことができました。
(療育部)

病棟バスハイク 水上バス体験



みんなで記念撮影
(水上バス前にて)

五月十五日(水)、初夏の陽気を思わせる晴天に恵まれ、三病棟利用者様五名と共に、お台場へ出かけました。アクアシティお台場ではフードコートで各自がメニューを選び食事をしました。食後は館内でゆったりと休憩をしてから、乗船場がある海浜公園へ移動しました。期待感を抱きながらいざ乗船! 船の後方には広いデッキがあり開放感一杯でした。普段体験できない海の上でのドライブを浅草まで楽しみました。下船後は「雷門」で記念撮影をして最後にお土産を買って思い出に残るバスハイクは終了しました。
(三南病棟 五十嵐)

第六一回 日本小児神経学会学術集会

(千葉県・千葉市)

五月三十一日(木)から六月二日(土)にかけて「こどものころとからだの発達に寄り添う小児神経学」と題して日本小児神経学会が幕張メッセ国際会議場(千葉)で開催されました。当院からは山本晃子医師により新規遺伝子変異を認めた症例報告および本澤志方医師により院内呼吸ケアチームの役割について報告されました。近年、新たな補充療法、遺伝子治療さらには再生医療が進歩する中で当院利用者には何ができるのか考えさせられた三日間でありました。
(副診療部長 荒井)

サービス向上委員会からお知らせ 〜 第三者委員のご紹介 〜

今年の四月から中澤剛さんが新しく第三者委員になりました。中澤さんは、日本橋淡青法律事務所の弁護士さんです。当センターの通所のボランティアとして来て頂いています。よろしくお願ひいたします。齋木博委員は昨年度から継続してお願いしています。



者た 三っ 者た
しく 第な 三っ
委員に なな 委員
中澤 剛 さん さん



医局の紹介

医局の構成は院長、副院長、常勤医師十名、常勤歯科医師二名、非常勤医師二十名（小児科五名、整形外科三名、耳鼻咽喉科二名、外科二名、リハビリテーション科一名、総合内科一名、眼科一名、婦人科一名、皮膚科一名、小児循環器科一名、児童精神科一名、遺伝科一名）の計三十四名で病棟と通所、外来診療に対応しています。

今年度より近藤範子医師、小野早織医師の二名の常勤医師および医局秘書として片寄美和を迎え現在の体制に至りました。

当センター開設（平成十七年十二月一日）から東京都に指定管理者として指定された社会福祉法人全国重症心身障害児（者）を守る会は「最も弱いものをひとりももれなく守る」という高い理想を掲げ、その障害児者の命を守るために現在でも数多くの各科専門非常勤医師による協力を必要としております。

当センターの利用者は常時濃厚な医療処置を要しさらに病態が変化しやすく、緊急時の診察や入院のため近隣病院との医療連携が大変重要となっております。

都内でさえ重篤な感染症や骨折など、いざ入院加療が必要となっても受け入れてもらえないことも珍しくありません。悪性腫瘍や緊急の外科手術を要する疾患に対しては手術、周術期管理を担っていただけの病院を探すことに大変苦慮することがあります。知的障害が主であり運動制限が軽く、不穏で興奮しやすい患児者は敬遠されがちであり、医療を平等に受け入れられるとは限らない現状を少しでも改善するため医局としては何ができるのかを今後とも皆で考えていきたいと思っております。

（副診療部長 荒井）

東部あれこれ

春のセンターの動きです。

【四月】

三月下旬から咲き始めた桜の下、新たに通所される方や新入職員を迎えて新年度が始まりました。かもめ分教室では、中学部の二人が高等部へ進学し、小学部、中学部、高等部に在籍する十三名の新しい学年がスタートしました。

二十日には、葛西臨海水族園から移動水族館が来ました。さわやかな晴天の下、ヒトデやナマコに触ったり、小笠原の熱帯魚や東京湾の魚を見て、楽しいひとときを過ごしました。



【五月】

元号が令和に変わりまりました。即位の日の一日が祝日になったため、ゴールデンウィークは長〜い十連休になりました。

五月は晴れの日が多く、夏日や真夏日など気温の高い日もありましたが、病棟のバスハイイクやグループ外出、乳幼児の遠足などの行事が元気に行われました。

また、二十一日には「看護の日」のイベントをスナモで開催し、酸素飽和度等の健康度測定や看護相談、栄養相談を行いました。

【六月】

平年並みに梅雨入りしましたが、晴れの日も多く、通所のバスハイイク等の行事も順調に行われました。

十六日の和太鼓演奏会では、全身に響き渡る音とリズムを楽しみました。十八日には職員の悉皆研修である医療安全研修を開催し、医療ガスの安全管理と医薬品の安全管理について学びました。



【編集後記】

梅雨時に最も似合う花、紫陽花がとても綺麗な季節になりました。もう少しで、梅雨も明け、暑い夏がやってきます。良く食べ、休養を取って、暑さに負けないよう暑い夏を乗り越えましょう。

今回から編集担当が変わりましたがご容赦願います。



←これまでのわか草をご覧ください
なりたい方はこちらからどうぞ